



和気あいあいと語らうスタッフたち。お揃いのバンダナはアフリカならではの染め布で作った

アフリカ中東部の小さな国、ルワンダ。四国の1.5倍ほどの面積に、1200万人ほどが住む。アフリカの中でも特に人口密度の高い国だ。この国では植民地時代から独立後の今に至るまで、国民の5人に4人を占めるフツと少数派のツチの間で確執が続いており、1994年には120万人が命を失った「ルワンダ虐殺」が起きた。

そのルワンダの首都キガリから車で2時間行ったフイエ県に、虐殺の被害者となった女性たちが立ち上げたアイスクリームショップがある。しかも、アイスクリームの本場ニューヨークの販売店が支援しているのだ、味は保証できるといふ。女性たちの活動への興味はもとより、東アフリカのアイスクリームにも興味を湧き、私はそのアイスクリーム屋さんを訪ねてみることにした。

発案者は、ルワンダの女性たちによるドラマグループ「インゴマシヤ」の創立者でもあるキキさん。「アイスクリームショップを開きたいとキキが言ったときは驚きました。当時、私はアイス

Voice ²⁴

ルワンダの甘い夢

国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)
タンザニア・カスル事務所

小宮理奈

リームなんて、食べるどころか知りもしなかったのです」と店長のマリ・ルイズさんは笑う。インゴマシヤのメンバーは、公演のために訪れたオランダで、キキさんに無理やりアイスクリームを食べさせられたようだ。「初めてアイスクリームを食べたときは、冷たいし体に悪そうだし、おいしいとは全く思いませんでした。でも、食べ進めるうちに、どんどんアイスクリームの魅力にとりつかれていったのです」と彼女は当時を振り返る。

その後、彼女たちは、偶然訪れたニューヨーク

のアイスクリームショップ「ブルーマール・ドリームズ」のジェニーさんとアレクシスさんに、ルワンダ初のアイスクリームショップ設立の支援を熱心に頼み込んだ。もともと、オーガニック食品やソーシャルな活動に興味があった二人は快諾し、メンバーにアイスクリームの作り方や店の経営ノウハウなどを徹底的に指導した。こうした努力が実り、2010年、地元フイエに「インゾージ・ンジザ」がオープンした。

「虐殺の後、世界から多くの援助が寄せられましたが、ほとんどが医療品や道路工事に充てられて、心のケアはおろそかにされていきました。人生とは、ただ生き残るだけのことではありません。自分には何かを楽しむ資格などないと思いついてきた人たちに、アイスクリームは喜びを与えてくれるのです」。そう話すのはキガリに2軒目を作るため「ブルーマール・ドリームズ」から「インゾージ・ンジザ」に派遣されているアメリカ人のローラさんだ。

現在、「インゾージ・ンジザ」は、大学生から国外の観光客まで、多くの人が訪れる場所になっている。地元の牛乳や果物を使ったアイスクリームは6種類。パッションフルーツ味やパイナップル味など、この地ならではのフレーバーもある。アイスクリームを作る機械の数が限られているため、店頭で食べられるアイスクリームは2種類のみで、2日ごとに入れ替えるそうだ。お店を訪れた国立大学の学生の一人は「アイスクリームはとても冷たくて、初めて食べたときはびっくりしました。でも、慣れるとおいしく感じるし、お店の



注文したアイスクリームを慣れた手つきで皿に盛るスタッフ。この日のメニューはストロベリーとチョコレートだった



元気いっぱいの笑顔を浮かべる店長のマリ・ルイズさん

「甘い夢」と名付けられたアイスクリームショップ。この国では、アイスクリームはあまり知られていない



店先にある可愛い立って看板。アイスクリームは体に悪いというイメージを払拭するため、「健康のために食べよう!」と呼び掛けている

雰囲気もいいので、また来たいと思います」と笑顔で話してくれた。

ビジネスが軌道に乗っているように見える「インゾージ・ンジザ」だが、いまだに多くの問題を抱えている。アイスクリームそのものの知名度の低さに加え、1週間に2回は起こる停電は特に深刻だ。アイスクリームの機械は南アフリカから取り寄せたもので、壊れてしまったときに直せるメカニックは、この国では首都キガリに一人しかいないという。

「改善すべき点は多々あるとは思いますが、アイスクリームが与えてくれる幸せを多くの人に伝え、みんなを笑顔にするために頑張っていきたいと思っています」。虐殺でさまざまなものを失ったマリ・ルイズさんは、自分の夢をそう語ってくれた。

Profile

こみや・りな
1988年、東京都出身。London School of Economics 大学院卒業後、国連児童基金(UNICEF)ウガンダ事務所やNGOなどを経て、現在は国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)タンザニア・カスル事務所勤務。その傍らフリーランスライターとして開発途上国に関する記事を雑誌などで発表している。

取材協力：大和田美香さん